

「楽しい主題 童心を描く」

「舟」と「子供」

(36)

春陽会 大澤鉦一郎

私の家から三町程で海へ出ます(*)。二十間幅位の川もあつて荷船や漁船が始終出入してゐますが、波船等の美しさに心惹かれるやうになつたのはここ四、五年來で、以前はどうも自分の領分でないやうに思つて手を出しませんでした。

(*愛知県大野町須賀——第十六回展図録から)

「舟」は一昨年の初夏海岸を歩いてゐると、子供達が岸に繋いである小舟の上で錨綱を引張つて、少しづつ舟の動くのを興おもしろがつてゐたのを鉛筆でスケッチして來たのです。

舟と四人の子供の配置からなる構図も大変氣に入つたので、これは大作になると思つて、又その舟を詳しく描きに行つたり、近所の子供をモデルに頼んだりして、水彩で数枚の下図を作つてみたのですが、水面の描写で行詰まりました。それでその時は目的をはたさず、近頃になつて静かな日の水影を好んで素描したおかげで漸よっやく水面に対する自信を得て又あれを描く氣になりました。

今度はあまり下図によらないで、子供に一寸あのポーズをしてもらつた

のと、舟や水影を見て來たのみで三日で描き上げました。まるで記憶画のやうなもので私としては珍しい事です。

これは仕上げに近づいて氣が付いたのですが、舟のバックに当る水面に用意が足りなかつた事で、そこに一番不満を感じます。そして今あの画を考へると、水全体の色調をもう少しどうかしたかつたと思つて居ます。

〔東京朝日新聞〕 昭和十三年四月十九日付 【写真は「舟」】

第十六回春陽会展 大澤鉦一郎出品作品

《アネモネとチューリップ》、《頬杖》、《舟》

